ウランバートルにおけるゲル地区の生成過程とその存立基盤
-問題地区から住まい空間への認識論的転換-

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-07-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松宮, 邑子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20926

2019 年度　文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

ウランバートルにおけるゲル地区の生成過程とその存立基盤
—問題地区から住まい空間への認識論的転換—

地理学専攻
松宮　邑子

社会主義国として近代化を遂げてきたモンゴルでは，市場経済への移行が開始された 1990 年以降，ウランバートルへの人口と都市機能の集中が急速に進んだ．1990 年代，2000 年代を通じて急激に増加した転入人口の受け皿となったのがゲル地区である．ウランバートルの居住地は，中心に位置し，電気や上下水道，セントラルヒーティングが完備されるアパート地区と，その周りを囲むように広がるインフラの欠如したゲル地区とに二分される．体制移行後，土地私有の開始とともに，人々は占有されていない土地を囲ってハシャーと呼ばれる区画をつくり，テント家屋のゲルや固定家屋のバイシンを建設し，住まうようになった．こうして拡大したゲル地区は，ハシャーの造成，ゲルの用意や組み立て，バイシン建設に至るまで，すべて居住者が自らの手で担うことによってつくりあげられてきた．一方でゲル地区は，インフラの不足や貧困，教育や健康の面などにおける社会的な剥奪が顕著な「問題」として取り沙汰されるようになった．

本研究の目的は，体制移行後のモンゴル・ウランバートルにおいて，人口増加にともなってゲル地区が拡大し，それが変容を遂げながら存立している実態を，居住者の住まう実践との関連において明らかにすることである．その際に筆者は，従来「改善すべき問題ある居住地」ととらえられてきたゲル地区を，そこに住まう人々にとっての「住まい空間」としてとらえなおすことを目指す．国際機関や研究者は，ゲル地区を発展途上国一般の「スラム」の一類型とみなし，インフラの無い居住環境や低水準の住宅といった「近代的な都市生活」に適わない諸要素を基準として，もっぱらその問題性を強調してきた．しかし，多くのウランバートル市民にとってゲル地区は生活の場であり，個々のハシャーはその居住者にとっての住まい空間である．人々は親族などのハシャーの一角を間借りしてゲルでの生活をはじめ，居住地移動を経て次第に自らのハシャーを獲得し，やがてはバイシンを建設する．住まい空間とは，このような居住者の住まう実践の積み重ねによって形成されるものである．しかし，単に居住者の現在の生活が営まれる場にはとどまらない．それは，個人や世帯が今日まで住まう実践を続けてきた結果の表れであり，さらにはこれからの生活の基点でもある．過去・現在・未来の時間軸を含めてとらえ得る住まい空間は，それをつくりあげ，維持していくための労働力や世代の再生産が担われる場でもある．

こうした認識の下，本研究ではゲル地区が存立してきた過程を，それを担ってきた居住者の住まう実践に焦点をあてて明らかにする．それに際しては，ゲル地区居住者 101 人を対象にインタビュー調査を実施し，歴史的事実や社会的な背景を踏まえながらライフヒストリーを読み解くことで，個人が移住や移動を経てゲル地区に定着していく過程と，ゲル地区が形成・拡大・存続されていく過程とを併せて検討した．質的な情報を補完する上では，統計情報や空中写真などの資料も活用した．

第 1 章では，ゲル地区を居住者の住まう実践によって構築されてきた居住地であり，居住者にとっての住まい空間ととらえる本研究の視点を明示するとともに，発展途上国における不良住宅地区およびゲル地区に関する研究をレビューした．ゲル地区は従来，発展途上国における「スラム」や「スクォッター」という既存の概念に押し込められることでその問題性が強調され，負のイメージに集約されてきた．そうしたステレ

オタイプ化されてきたゲル地区のイメージを相対化し，本研究の目的が，既成概念から離れてゲル地区をとらえ，ゲル地区がいかに存立してきたかを理解することにあると確認した．

第 2 章では，社会主義時代から体制移行を経て今日に至るまでの社会・経済的な事象や制度的な枠組みの変遷を概観し，ゲル地区が現在の姿として確立される過程を整理した．ゲル地区は社会主義時代から一貫してアパート化による開発が目指されてきた．しかし，移行後は地方での生活基盤の崩壊や居住地移動の自由化，土地私有の開始を背景にウランバートルへの転入人口が急増した．その受け皿となったことでゲル地区は爆発的な拡大を遂げた．ゲル地区は一貫して問題ある居住地と位置づけられてきたが，章の後半では，実際にそこに暮らす人々にとってその環境はいかなるものであり，人々が日々の生活をどのように営んでいるかを詳述した．

第 3 章では，空中写真とインタビュー調査を組み合わせ，ゲル地区が形成・拡大・存続していく過程を，人々の居住地移動やハシャーの獲得との関係から明らかにした．ゲル地区の拡大過程は時代によって異なる．社会主義時代には住宅供給の不足を補う居住地として，行政の管理下で整然とした街区が造成された．しかし移行後は管理機能が弱体化し，土地私有の開始とともに土地の囲い込みが早い者勝ち的に進んだ．現在では新しくハシャーをつくれるのは都心から離れた場所に限られ，中心部近辺では商品として購入することでしか取得できない．また居住者はハシャーを得て数年後にはバイシンを建設するが，一方で敷地に新たなゲル居住者を受け入れもする．移住直後や結婚後の親族のハシャーにおける一時的なゲル居住は，当然の住まい方として人々の間で定着している．全体を見れば居住環境の充実を目指したバイシン建設が進むものの，ゲル居住者を受け入れることで，地区からゲルが無くなることはない．これらを通じ，ハシャーという個々の敷地に常に定住性と遊動性を有しながら居住地としての恒常性を獲得してきたという，ゲル地区の固有性を見い出すことができた．

第 4 章では，居住者の就労と生活の履歴をたどりながら住まい空間がいかに構築され維持されているか明らかにすることを通じて，ゲル地区の存立と不可分の関係にある再生産の基盤を検討した．従来，ゲル地区は低所得者による不安定居住の集積と特徴づけられてきたが，移住目的や就く仕事，将来展望が全く異なる人々が隣り合って暮らし，多様な住まい空間が形成されている様子が明らかになった．しかし，個人の職歴が移住歴や学歴に規定され，世帯形成後の生活や将来設計の描き方もまた現在までの履歴に影響される．こうした実態からは，多様性が格差として顕在化する可能性も示唆された．

第 5 章では，ゲル地区再開発事業を焦点に，インフラの整備されたアパートの入居という個々の主体性だけでは解決し得ない課題を検討した．ゲル地区のアパート化は，社会主義時代から一貫して目指される居住環境の改善策である．しかし，実現への道筋が不明確であるがゆえに期待通りに進展していないだけでなく，従来から実践されてきた居住者自身の手による住まい空間の改善を阻害してさえいる．一部のアパートは竣工し，その入居者は生活の利便性が向上したと評価する半面，ゲル地区ならではの住まい方が継続できない困難も指摘される．ゲル地区のアパート化や短期間でのインフラ整備が現実的でない中，居住者が元来発揮してきた内発的な居住環境改善の実践を正当に評価することの必要性を示した．

以上を踏まえ第 6 章では，本研究の知見を整理するとともに，それが示唆するゲル地区の今後を展望した．ゲル地区は居住者の住まう実践の積み重ねの帰結として生成してきたが，一方でその実践はそもそもゲル地区が存立可能な地理的・社会的条件があってこそ発揮され得る．それは，遊牧という生活様式や気候が寒冷・乾燥であること，社会主義下における近代化の経験と市場経済への移行といった特性に求められる．遊牧業に由来する移動性，耐寒性にすぐれた住宅であるゲルの発達や，濃密な親族関係の存在なしにゲル地区居住は語り得ない．また，社会主義時代にアパート化が完了しなかったことにより，ゲル地区という居住地が既成事実化したという側面もある．そして市街地周辺の広大な土地を私有地として囲い込むことが可能であった状況が，ゲル地区拡大の前提条件であった．つまり，ゲル地区はウランバートルに半ばあるべくして存在し，こうした条件の下でこそ人々は住まう実践を発揮し，住まい空間を形成してきたのである．

しかし本研究においては，これまでゲル地区の存立を支えてきた諸要素に変化の兆しもみられた．たとえば，従来は自らつくるものであったハシャーやバイシンが商品化しつつあり，ゲル地区における住まい空間

形成の手段が貨幣による交換に移行しつつある．親族関係には希薄化の一端も窺え，誰かのハシャーに住まわせてもらうことが当然ではなくなってきてもいる．住まい方が変化する過程では格差の顕在化も予見される．本研究では，人々の住まう実践に焦点をあてることで，これまで一面的にとらえられてきたゲル地区の多様性を示してきた．だが，これまで多様性ととらえ得た人々の住まい空間の差異は，やがては格差として具現化し得る．従来，ゲル地区に住まうことはさまざまな制約下における居住者による住まい空間の形成として理解できた．しかし今後，ゲル地区居住が「未だ脱せない」「居ざるを得ない」という消去法の意思決定を示すようになる可能性は否定できない．

こうした傾向と密接に関係するのが，グローバルな移動をともなう住まう実践である．より良い賃金や教育の機会を国外に求め移動することは，人々にとって身近な選択肢と化している．ゲル地区における人々の生活と変容を検討する上では，人々の住まう実践がおよぶスケールを広げ，グローバルな関係性の下でゲル地区，ひいてはウランバートルという都市の存立を検討していくことが不可欠である．